

## 二十五歳

勇氣を出せ。たとえ肉体はいかに弱くあろうとも、わが魂はこれに打ち勝たねばならぬ。二十五歳——そうだ、二十五歳になったのだ。今年こそ、男一匹ほんものになるかならぬかを、決めねばならぬ。

ことし本校を卒業したU君が、卒業式のあと色紙を持ってきて、何か書いてくれといった。そのうち書いておくと約束したまま、はやくも夏休みをむかえてしまった。

先日、前京大総長平沢興博士にお話を聴く機会があった。大正九年、博士が大学入学まもなくひどい不眠症におそわれ、一学期（当時は九月入学であった）もまだ終わらない十二月早々、郷里の新潟に帰って静養につとめた。家の裏へ出ると、よく晴れた日には、何十キロにわたって白色に塗りつぶされ、何ひとつ目をさえぎるものもない雪景色が、眼前にひらけた。このような郷土の自然に接しているうち、心のわだかまりもいつしか解きほぐされてゆくようであった。そんなある日、前記のベートーヴェンの自戒の言葉が、ふと啓示のように思い浮かんだという。すで

にかれの肉体の破壊をはじめた聾疾を自覚したときの心懐を、みずから手帳に書きつけておいたものがこれである。ベートーヴェンのこの言葉が、どんなに自分を力づけてくれたか知れない、ともいわれた。わたくしは、さっそく請うて、ありあわせの巻紙にそれを書いてもらった。さきに掲げたものがそれである。

U君は見るからに健康そうな少年である。肉体の疾患はあるいはまぬかれるかも知れない。しかし、青春期を吹きまくる心のあらしは、しよせん避けることはかなわないであろう。その目のために、平沢博士訳の右の言葉を、預っていた色紙にしるして、少々おそまきのはなむけとすることにした。

(昭和四十一年十月)